The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	E. M. フォースター『天使も踏むを恐れるところ』を母と「娘」の葛藤の物語として読み直す
Author(s)	村田, 幸範
Citation	Osaka Literary Review. 2010, 48, p. 25-37
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/25334
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

E. M. フォースター『天使も踏むを恐れるところ』を母と「娘」の葛藤の物語として読み直す

村田　幸範

1．序論－本論考の目指すもの

今日の立場から、フェミニズムそしてジェンダー・クリティシズムを振り返ってみると、母性をめぐる議論はすでにいくつかの完成点を通過した感がある。その一つには、父権が発揮する支配的な抑圧への対抗言説として、母性が果たす役割を拡充して考える志向性があることは間違いない。

こうした論点も、先進国における全体的な少子化の進行の中で再度検討に入ることが求めらていることは言うまでもなく、実際「女性が母となること」をめぐる議論は、アカデミックなものから、具体的な政治の場、経済資本に関わる場所、そして家庭という身近な空間においても繰り返し語られる、アクチュアルな主題になっている。フェミニズムをめぐる議論の中でも、母性について再度考えなおす要請は内外から高まっているし、それらに応答する姿勢も見られる。もとより母性をめぐる議題は、ジェンダークリティシズムへの結節以前から、フェミニズムの中ではお家芸的な話題でもあり、いくつもの主要な著作を思い浮かべることが出来る。実際に子供を育てた母として、アドリアンヌ・リッチが 1986 年に書いた『女から生まれる』はその代表的な一冊といえる。この本にも見られる考え方だが、男性の家父長的な連続性、父から息子へと繋がる系図というマスキュリンな時間への対抗言説として、フェミニズムが主張したのは、母から娘へというフェミニンな連続性だった。系図で不可視なものとされた女性の名前を掘り起こすこと、そして娘から母へと時を遡りルーツを辿る旅と、自身も母になっていくことを選択する未来への眼差しを結びつけるという、彼女らの思想は、彼女ら女性を子を産むた

めの器と見なしてきた男性言説への対抗であると同時に、子を産むという命がけの労働をポジティブに受容するための思考の転換点を形成していた。そうした言説の展開を反映し、80年代の小説や映画などでは、多くの母と娘をめぐる物語が作られれ、男性父子の間には見られない濃密な関係を女性の絆として描くことが行われた。『マグノリアの花たち』のようなメロドラマ的映画などにはその影響を強くうかがうことが出来る。

21世紀の現代でも、収奪される女性の生殖機能に対して、母と娘の物語は充分な対抗言説として機能している。しかし、その一方で、あまりに理想化された母と娘の関係に違和感を覚える人々も出てきている。むしろそれは、すでに違和感というレベルを超えて、自分の人生を抑圧し支配する力として機能しているのではないかという疑念が、母との関係に悩む娘の証言を取り上げる（主に心理学的な研究分野からの）報告によって提示されるようになってきている。最近出版された斉藤環の『母は娘の人生を支配する　なぜ「母殺し」は難しいのか』は、そのタイトルが端的に示すように、母と娘の共依存関係をとりあげた書である。女性主体への父権による抑圧が先進的な社会で軽減されていく中、可視化されるようになってきた「母から娘への抑圧」の問題について、物語と臨床例から分析した良著である。「母殺し」とはもちろんエディプスコンプレックスの「父殺し」の対偶を意味するのだが、後期資本主義社会で「父殺し」がビルドゥングス的価値を持って息子たちの自立を要請したこと、また、その過程で男子による「母離れ」の必要性も語られてきたことと比較すると、娘たちの「母殺し」「母離れ」は、これまであまり顕在化されることもなく、俗流にダウングレードして流通されることもなかったように思われる。のみならず斎藤は、母と娘の関係が、他の親子関係（父と息子、母と息子あるいは父と娘の関係）には見られないほど複雑で濃密であり、それゆえとても困難なものであることを主張している。

女性を抑圧する力は、これまでのところ多くの場合父親が発現するものとされてきた。それは肉体を供えた実際の父ではなくとも、法や規範といった

「ことば」となって女性の生（と性）をも、フィギュラルに抑圧してきたというのが、心理学系フェミニズムの基本的共有言説の一つと言ってよい。その中では、ときに女性が女子を抑圧する事例もあげられた。例えば、娘に対して非常にしつけの厳しい母親はその一例であるし、英文学の場で言うなら、ガヴァネスによる女子教育などにその範例をみることもできる。しかし、これらは、女性による女子抑圧の問題としては取り上げられず、これらの抑圧行動に走る女性は、男性の作った社会構造の中で、男性のために都合の良い女子を生産する役目を担わされたエージェントである、という見方が大勢を占めていたように思われる。女性を女性が抑圧するというのは表面的な表れに過ぎず、その背後で男性の作ったシステムが彼女らを監視し、教育者である女性を手先に使ってきたのだという考え方である。英文学作品でも、女子を近代社会に「ふさわしい」主体として鍛えあげることを求められた口うるさい校長先生などが登場する例はいくらでもあげることができる。たとえばフランシス・バーネットの『小公女』やシャーロット・ブロンテの『ジェーン・エア』の少女時代などが思い浮かぶだろう。

だが、このような見方に疑問がないわけではない。はたして、全ての抑圧を「父権」の代行と考えていいのだろうか？それは逆に「母」の主体をそこなうことになるのではないか、という考えも同時に浮かんでくる。母と娘の関係は、近代そして後期資本主義社会の病理と見なすだけで良いのだろうか？

本論考ではこのような「母」による「娘」の抑圧、あるいは、「母」の支配に対する「娘」の戦いの物語として、E. M. フォースターの『天使も踏むを恐れるところ』を読み直してみたい。もちろんこの作品が男性作家の筆によるものであるという、本質主義に基づく瑕は当然含まれることになる。しかし、フォースターが母からの抑圧を克服できなかった「弱い子供」であることの方を、セックスの違いという本質主義的二元論よりも重視したい。人が、言語と言う「大文字の他者」を、自らの欲望を統御するシステムとして身の内に抱えており、かつ他者と繋がりあうためのプロトコルとして身の外

へ開いているのならば、欲望のコードとしてのエクリチュールの様々な軌跡を（作者の肉体上の性を棚上げにして）追跡することも可能なはずである。そのために彼の同性愛というセクシュアリティを突破口として考慮に組み込みたいと考えている（ただし作品の最終的帰結点と見なすことは注意深く避けられねばならない）。

2．作品の様相

では、まずこの作品の概要から紹介したい。本作品はフォースターの長編第一作にあたる。成立に当たっては、それより先に、第二作である『眺めのいい部屋』のほうが書き始められていたということが、日記などを元にした伝記研究から検証されており、定説となっている。これら両作品は、ともにイタリアを舞台としていることや、風俗喜劇的な明るい色調、イギリス郊外の中産階級社会の閉塞性を揶揄する内容、男女の恋愛をめぐる物語であることなどを踏まえ、まとめてイタリア小説として論じる向きもある。ライオネル・トリリングや川口能久の著作はこういったスタンスに基づいてる。

と同時に、この作品だけがその後のフォースターの長編小説と大きく異なっている部分もある。主人公もしくは狂言回しであるフィリップ・ヘリトンは、当初退屈な女性と思っていたキャロライン・アボットの意外な面を発見し、彼女に恋愛感情（そしてそれが長じての崇拝の念）を抱くのだが、このように女性に恋をする男性の心理に深く切り込み、それが主題化された長編は他にあまり多くはない。他の長編では、男女の恋愛を描く場面で、女性側の心理が男性に開示されないまま物語が進行するという例は珍しく、個々の場面で女性登場人物がどのように考えているかについては、たとえその場面での視点人物が男性であっても、フォースターは地の文に彼女の心理を書き下すか、あるいは書き表さないまでも、男性人物に読み取らせ代弁させている。つまり、なにを考えているのかが不明瞭で、それ自体が物語の推進剤として機能する「謎の心」を持った女性が登場することはあまりないと言って良い。

確かに『ハワーズエンド』のルース・ウィルコックスや『インドへの道』のムア夫人などは謎めいた人物だが、その言動や行動は、肉体をそなえた現実的なキャラクターとしての位置づけというより、どちらかというと、象徴的な言葉を発する神話的なキャラクター（『インドへの道』のゴドボールのようなある種デウス・エクス・マキーナ的存在）とみなすこともできる。それに対して、本作品のキャロライン・アボットは、語り手によって彼女の思考があからさまに示されることは少なく、常に視点人物であるフィリップから「彼女はなにをかんがえているのだろう？」と疑問を向けられる相手となっている。そして爆発的に彼女が心情を吐露する場面があって、初めてフィリップは彼女の心情に気付き、その衝撃を通じて彼女に恋愛感情を寄せていくという仕掛けになっている。

以下の引用部分が今述べたキャロラインによる心情吐露の場面である。これまでの人生を、ただの傍観者として過ごしてきたと自虐的に語るフィリップ対して、彼女が怒りを爆発させる場面である。

> "None at all. Fight as if you think us wrong. Oh, what's the use of your fair-mindedness if you never decide for yourself? Any one gets hold of you and makes you do what they want. And you see through them and laugh at them — and do it. It's not enough to see clearly; I'm muddle-headed and stupid, and not worth a quarter of you, but I have tried to do what seemed right at the time. And you — your brain and your insight are splendid. But when you see what's right you're too idle to do it. You told me once that we shall be judged by our intentions, not by our accomplishments. I thought it a grand remark. But we must intend to accomplish — not sit intending on a chair."
>
> "You are wonderful!" he said gravely. (134)

「あなたは他人の気持ちを見抜いていてもシニカルに笑って座っているだけ

で何もしない、そんなのは誠実とはいえない。なにかを成し遂げる意図を持たなければ」という彼女の言葉に、フィリップが目を覚まされ、同時に彼女を賞賛するようになる場面である。隠蔽されている女性の心理を知りたいという思いが、恋愛と物語の推進材料になるという点で、これは古典的な恋愛小説の技法をなぞったものといえるのだが、他の長編の男性主人公が、女性の心理を早々と見抜いたあとは、どこか自分より考えの足りない相手としてシニカルに笑って見下していることが多いことと比較すると、このキャロラインのセリフはその後のフォースターの男性人物全てを、予言的に批判しているようで非常に興味深い。つまり、この小説におけるキャロライン・アボットという人物は、他のフォースターの小説にはあまり出てこない女性人物であり、この一見大人しいだけに思われたキャロラインの火のような激しさが誰に向けられているのか、そして、それを他の批評家はどのように考えてきたのかを考えることと、最初に述べた母子関係のアクチュアルな問題意識とを接合することが本稿の目標となる。

作品の特異性を確認したが、次はあらすじを確認しておきたい。この作品は、中産階級ばかりが住むイギリス郊外の街、ソーストンを舞台とする前半と、開放的なイタリアの田舎町モンテリアーノを舞台とする後半とに、大きく分かれている。前半は、ヘリトン家の寡婦リリアがイタリアに、キャロライン・アボットと一緒に旅立つシーンから始まる。彼女は、このヘリトン家の長男チャールズの嫁として嫁いできたのだったが、早々にその夫とは死別し、娘のアーマと共にヘリトン家の家長ミセス・ヘリトンの元で監督されて暮らしている。ミセス・ヘリトンには死んだ長男のほかに二人子供がいる。長女のハリエットは、生真面目で国教会の教えを絶対視しているだけの独創性の無い人物であり、フォースターの描いた中でも、もっともカリカチュアされた中産階級的人物と評されることが多い。そして次男のフィリップは、イタリアの美や芸術を愛する、頭は良いけれども皮肉屋な人物である。この二人の子供はともに、強権的な母であるミセス・ヘリトンの言いなりになっ

ている。ハリエットは母の言葉に逆らうことなど思いもよらない従順な娘であり、フィリップも母のやり方にうんざりしつつも「僕はしょせん母の操り人形ですから」と従っている。この中産階級的価値観の権化とも呼ぶべき「強い母」ミセス・ヘリトンのことを批評家アラン・ワイルドは、"[...]and Mrs Herriton is always the director, never the actor." (Wilde 5) というように簡潔に紹介している。物語中ではさして目だった存在ではないミセス・ヘリトンがディレクター（＝支配者）であり、アクター（＝行為者）ではないという、メタ物語的な指摘は大変興味深い。

ところで、この一家に嫁いできたリリアは、奔放で自己主張の強い人物だった。最初からこのような性格のリリアと息子の結婚には反対していたミセス・ヘリトンだったが、彼が死んだ後は、嫁が世間で恥ずかしい人物と見られないようにするため、彼女と彼女の娘を徹底的に再教育し中産階級的価値観に染まった女性の型にはめていこうとする。その抑圧に耐えかねてリリアは、娘のアーマを置いてイタリアに旅行に行く。ミセス・ヘリトンは、監督者にソーストンの街でも一番の「清廉潔白で立派なお嬢さん」であるキャロライン・アボットをつけて送り出す。ペダンティックなイタリア崇拝者のフィリップも「イタリアに行けば彼女は良い人間になって帰ってきますよ」などと母の考えに賛同する。

だが、そのイタリアでリリアは、ハンサムだが身分の低いイタリア人男性ジーノと婚約する。この結婚を止めるべく、ミセス・ヘリトンの代理（エージェント）となってイタリアに送り込まれたフィリップは、そこでキャロラインに出会い、そしてジーノ本人とも出会う。若く魅力的なジーノに強く心惹かれたフィリップは、彼に結婚を思いとどまるよう頼むが、時遅く二人は既に結婚したあとだった。このとき、フィリップは、リリアがミセス・ヘリトンの監督下で、どれだけ自由を奪われ苦しんできたかを聞かされる。彼女がイタリア人と結婚したのは、ただひたすらにその「母」による重圧から逃げるためだったのだと。だが、そのような形で始まった結婚はうまくいかず、

リリアは男の子を出産して死ぬ。ここまでが前半である。

後半では、この赤ちゃんの存在を一旦は黙殺しようとしたミセス・ヘリトンが、嫁の子供を捨てた一家という汚名を着ることを恐れ、ハリエットとフィリップに赤ちゃんを引き取ってくるよう（実際にはジーノに金を渡して買い取ってくるよう）命じるところから物語が再開する。奇妙なことに、ただの同行者であったはずのキャロライン・アボットも、この赤ちゃんに責任を感じて引き取ろうとしており、ミセス・ヘリトンは、この慈善家の娘のでしゃばりが気に食わず、彼女に手を出されないよう先手を打って自分の家に引き取ろうと考えたのだった。しかし、フィリップとハリエットがイタリアについたときには、既にキャロラインも来ており、彼女とヘリトン姉弟、そしてジーノの三者での赤ちゃんの争奪戦と言う形になる。当初、イギリス人たちはジーノが赤ちゃんをもてあましており、金さえ払えば買い取れると考えていた。しかし、キャロラインは、ジーノが本当に赤ちゃんを愛しており、自ら風呂に入れるほど可愛がっていること、赤ちゃんのために再婚まで考えていることに衝撃を受け、父親である彼の元に赤ちゃんを残すほうに傾く。そして彼女は、母であるミセス・ヘリトンの言いつけに従い意地でも赤ちゃんを連れ帰ろうとするハリエットと対立し、フォリップには「あなたは傍観者であることをやめてどちらの側につくか言ってください」と詰め寄る。既にジーノと友人関係になっていたフィリップもキャロラインの考えに賛同し、ジーノから赤ちゃんを奪うことは止めて全員で帰国しようとしたのだが、その矢先にハリエットが独断で赤ちゃんを誘拐してくる。そして馬車で逃げ去ろうとして事故にあい、投げ出された赤ちゃんは死ぬ。責任を感じて、ジーノの元を訪れたフィリップは、暴力的な報復にあい死にそうになるが、間一髪キャロラインが仲裁に入り助かる。そのとき、ジーノをなだめるキャロラインの姿を、フィリップは女神のようだと思い、彼女への思慕を深める。しかし、イギリスに帰る汽車の中で、キャロラインは激しく自分の恋心を吐露する。彼女はジーノを愛しており、最後のときには身も心も捧げるつもりだっ

たのだと。だが自分の片想いの相手が他の男を好きだというこの告白を聞いて、むしろフィリップはより深く彼女を崇拝するようになり物語は終わる。

3．キャロラインをどう読むか？

以上のあらすじからも明らかなように、フィリップとキャロラインとジーノの三角関係がことさらに魅力的なことから、多くの批評家はその関係について分析を行っている。そのほとんどは、キャロラインがジーノへの愛を告白したことが何故逆にフィリップを満足させたのかという理由として、フィリップもまたジーノを愛していたからだという同性愛心理の存在を挙げている。もちろんこれは作者フォースター自身の同性愛傾向を踏まえた論だが、その典型的なものに以下に挙げるロバート・K・マーティンのものなどがある。

> Philip's apparent love for Caroline is in fact a displacement of his desire for Gino; if Caroline (and Lilia) had held Gino, then Philip can achieve his goals, indirectly, as part of a homosexual triangle of desire, like those described by Eve Kosofsky Sedgwick in *Between Men*, embracing Gino *through* Caroline. (Martin 256)

だがこうした読みに対して、筆者はいくらかの不満を感じてしまう。こうしたマーティンを代表とする分析は、登場人物の関係をジラールやセジウィックの論にあまりにも記号的に当てはめすぎている気がするのだ。欲望論はテクストを還流する「大文字の他者」すなわちエクリチュールを主たる問題とするものである、と理解するならば、このようにキャラクターを関係項に対応させるパズルのような読みは図式化のそしりを免れない。したがって一人のキャラクターが一つの項＝役割を担うという、主体に偏った読みを解体する必要を感じる。

すなわち、言葉（あるいはそこに表された主張）と、それを発するキャラ

クターとの結びつきを一度解きほぐし、複数の人物の発言として刻まれた言葉を、一定の主張の還流として配置しなおすことこそが欲望論の目的となるべきではないだろうか。それも、単純に似通った主張を合一し「作者の主張」として編みなおすだけでは不十分である。展開された言葉の流れを作者というディレクターに還元するのではなく、むしろそれら言葉の還流が作者という特異点にどのような影響を与えたかを問い直すことで、エクリチュールの効果を測る取り組みが必要となるはずなのだ。

こうした観点からもう一度キャロラインとフィリップの置かれた立場を考察してみたい。そうしたとき興味深いのは、フィリップらヘリトン一家には父親がいないということと、逆にキャロラインには母親がいないということだ。どちらも核家族という近代家族規範からは崩れた枠が採用されている。また、母のいないキャロラインが母の言いつけに従ってばかりいるフィリップに次のように言う場面がある。

> "Your mother has behaved dishonourably all through. She never wanted the child; no harm in that; but she is too proud to let it come to me. She has done all she could to wreck things; she did not tell you everything; she has told Harriet nothing at all; she has lied or acted lies everywhere. I cannot trust your mother. So I have come here alone — all across Europe; no one knows it; my father thinks I am in Normandy — to spy on Mrs. Herriton. Don't let's argue!" for he had begun, almost mechanically, to rebuke her for impertinence. "If you are here to get the child, I will help you; if you are here to fail, I shall get it instead of you." (100)

キャロラインは、日頃の彼女からは考えられない率直さでフィリップの母親を攻撃しているのだが、それはフィリップが口にしたくても口に出来なかった母親への不満とまったく同じことであり、あたかもキャロラインはフィリップの代弁者なのかと思わせる。その結果、「フィリップがジーノへの愛情を

（想像的に）解消するためにキャロラインの女性性を提供してもらう」といった種類の、キャロラインを単なる男性同性愛の媒介項としてみなす（マーティンら）批評家の読みを、テクスト中の彼女自身の言葉が解体する。彼女は彼のエージェントであることを超えて、もう一つの彼の現れ、即ち分身なのではないかと言うことが可能になる。言い換えるなら、彼女は一つの主体の中の「良き部分」であり、自嘲気味に自分を能無しだと語る「悪しき部分」であるフィリップに、「それでも行動せよ」と語る女神なのだと言えるだろう。

4．結び

フェミニズムによるクリティシズムとそこから生まれたジェンダー・クリティシズムの大きな違いの一つには、主体の取り扱いがある。本質主義的なフェミニズムは、女性の肉体と精神を一体のものとして擁護し、主体としての権利を確保する傾向を強く持っている。それは例えば、女性の権利が肉体ごと蹂躙されるような現場を考えれば、今日なお絶対に必要な主張であることは言うまでもない。しかしその一方で、文学作品を始めとするブルジョア的エクリチュールに現れるジェンダー・アイデンティティは、一つの器、一つのキャラクターにその外骨格を制限されないものへと脱皮させることも可能なものではないだろうか。逆に、物語内容とそこにおける主体の位置づけを、ある単一の位置取りに縛り付けることは、物語の祖形を心の中で反復するという営為を通じて、自分を逃れられない「娘」の位置に封じ込める言説として機能してしまう可能性もある。そのとき批評家は典型的な解釈を縮小再生産することで、文学作品を抑圧の道具として流通させることに加担してしまっているのだ。

『天使も踏むを恐れるところ』に表れた母による支配への対抗衝動は、キャラクターにおいては男性と女性に分裂し、フィリップとキャロラインになったのではないかと分析できる。もちろん、この二人に加え、盲目的に母に従うハリエットも分析対象とし、赤ちゃん（＝未来の自己統一の可能性）の争

奪戦として全体を語りなおすことも可能だ。このような分裂した自己をめぐる解析としてはメラニー・クラインらの対象関係論が容易に想起される。たとえば「投影性同一視（他者に自己の葛藤を当てはめてイメージすること）」のモデルを援用すれば、フォースターの葛藤を担うキャラクター群の入り混じり方をより複雑に分析していうことも出来るだろう（あるいは、キャラクターの関係に同性愛モデルを見出したくなる、「批評家自身の」心理を分析することも可能だ）。

ともあれ、この論考の狙いは、母による支配への対抗言説として織り込まれる「娘」のことばにあるのだが、そのように焦点を絞り、もう一度二人で一人の「娘のことば」＝キャロラインとフィリップのありようを見るならば、作者自身の「肉体の」（それはこの場合「見かけ上の」と言ってもさしたる違いはないのだが）性と乖離したキャロラインの強い意思を持った言葉は、どこかフィクションに基づく「理想の言葉」として響いていると言って良い。一方、作者と「肉体の」性を同じとするだけに、より現実の舞台に根を下ろしたフィリップは、理想の女神の言葉を耳にして憧れながらも、なかなか行動できない優柔不断な「実存的」人間になっているのではないだろうか。しかし、そんなフィリップが、物語の最後にキャロラインに自分の決意を語る場面がある。「前よりよりよい人となった」と語り手に評された彼は、母の元をはなれてロンドンで暮らすことになる。中産階級だけが住む、均質だが閉鎖的なソーストンを離れ、雑多なロンドンに自らの居を求める。一方、キャロラインはソーストンに残ろうとする。彼女のような理想を描いた言葉を口にする者は、批判の対象が息づく場所でしか生きられないのだ。

この分裂を裏書するように、あるいは分裂を受け入れ昇華したかのように、フォースターは自らの肉体はロンドンに置きながら、中産階級的英国性に捕らわれた社会を批判的に言葉でもって描いていく。母への支配に統一して当たる可能性は夭折した赤ん坊のように死んでしまったものの、フォースターは自分にとって謎でもあり憧れでもあった言葉というものにたどり着く。そ

してロンドンという雑多な現実に根を下ろしながら、どこか理想的ながらも倫理的な言葉を発していくことになるのだ。

Works Cited

Primary Sources

Forster, E. M. *Where Angels Fear to Tread.* 1905. Ed. Oliver Stallybrass. London: Penguin, 2001.

E. M. フォースター『天使も踏むを恐れるところ』訳：中野康司. 東京：白水社、1993.

Secondary Sources

Martin, Robert K. "It must Have Been the Umbrella." *Queer Forster*. Ed. Robert K. Martin and George Piggford. Chicago: U of Chicago P, 1997. 89-112.

Wilde, Alan. "The Aesthetic Views of Life: *Where Angels Fear to Tread.*" *Modern Fiction Studies* 7 (1961): 207-216. Rpt. in *E. M. Forster: Critical Assessments*. Ed. J. H. Stape. Vol. 3. London: Helm Information, 2001. 3-12.

斎藤環『母は娘の人生を支配する　なぜ「母殺し」は難しいのか』東京：日本放送出版協会、2008.